

～殺処分をなくすために考えたこと～

2023-6-5

3年2組5番 入江穂奈 (共同研究者:井上茉咲、梶谷麻衣、増田来生、橋村心花)

1. はじめに

私は小さい頃から動物に興味があり、中学時代には卒業研究で、ペットの殺処分の日独比較について研究した。この時の結論として、ドイツは殺処分は行っていないが、狩猟で沢山の犬猫が殺されているため、日本は日本でこのまま対策を進めていけば良いのではないかという結果に至った。しかし、高校のグローバル探究で日本の現状を調べてみると、まだまだ犬猫の殺処分数が多い地域があることが分かった。そこで私は、日本で殺処分されてしまう犬猫を救いたいという思いから、この研究テーマを選んだ。

2. 序論

・目的

私達は殺処分について興味を持ち、殺処分されるペットをどうにかして助けたいという思いからこのテーマについて探究することになった。本研究では、地域(保護施設)の取り組みが、譲渡率や殺処分率と関係があるのかについて調べた。

・方法

まず殺処分率と譲渡率について調べた。また、現状を知るため、保護施設へのボランティアへ行った。また、犬を飼う私たちにとっても大きな関係があるマイクロチップについて調べた。

3. 本論

・結果と分析

1. 全国の殺処分率と譲渡

まず、各地域の殺処分率を計算し、どこの地域が殺処分率が高くどこの地域が低いのかを調べた。環境省に示されたデータから、 $(\text{処分数}) \div (\text{引き取り数}) \times 100$ で殺処分率を求めた。全国の殺処分率のデータを出すことができたが、同じ殺処分0でも母数の引き取り数が多い地域と小さい地域では、その地域での活動量の差が出ているということに気がついた。図1①より八尾市は1匹引き取ったうち0匹殺処分・1匹譲渡しているから殺処分率が0%と、高松市は481匹引き取ったうち360匹殺処分・173匹譲渡しているから殺処分率が75%である。これより譲渡数が多くても殺処分数が少ないとは限らないことがわかる。さらに、殺処分が0だったとしても、そもそも引き取った犬の数が少ないこともある。このことから私たちは殺処分率0だけが良いこととは限らないことに気がついた。また、「譲渡率が高い地域と低い地域の殺処分率0では活動量が違うのではないか」という考えと、「譲渡会が活発化すれば、保護施設が預かっている全ての保護犬が譲渡され、殺処分されることもなくなるのではないか」という考えのもと、地域の殺処分率0に向けた対策が数字に表れているのは譲渡率だと仮説を立てた。そして譲渡率を上げることに貢献する要因がわかれば、それを各自治体に広めることによって解決につながるのではないかと考え、高い譲渡率を割り出している地域の規則性を調べることにした(図2では、赤は譲渡率の高い地域、青は譲渡率の低い地域を示している)。「譲渡率 = $(\text{譲渡数}) \div (\text{引き取り数}) \times 100$ 」と求めた。図2より、新潟県は114%、愛媛県が33%であり、譲渡率に大きな差がある。しかし全国の譲渡会をまとめたホームページ(https://www.pet-home.jp/event/ecg_1/)から、一年に開催している譲渡会の回数や頻度、開催日を比較しても、開催頻度が高いから譲渡率が高いというわけではなく、また、申し込みの方法や立地を比較しても、大きな差はなかった。さらに、具体的な対策や取り組み

みななどの詳細をホームページに掲載していることはほとんどなく、高い譲渡率を示す地域とそうでない地域に、その取り組みにおいて大きな差を見つけることができなかった。

	引き取り数	殺処分数	殺処分率	譲渡数	譲渡率
八尾市	1	0	0	1	100
高松市	481	360	75	173	36

図1①:譲渡率と殺処分率の比較

自治体名	引き取り数	譲渡数	殺処分数	譲渡率	殺処分率
高松市	481	173	360	36	75
八尾市	1	1	0	100	0
高松市	481	173	360	36	75

自治体名	引き取り数	譲渡数	殺処分数	譲渡率	殺処分率
高松市	481	173	360	36	75
八尾市	1	1	0	100	0
高松市	481	173	360	36	75

自治体名	引き取り数	譲渡数	殺処分数	譲渡率	殺処分率
高松市	481	173	360	36	75
八尾市	1	1	0	100	0
高松市	481	173	360	36	75

図1②:譲渡率と殺処分率の比較全体

2. 保護施設の現状

実際に保護施設の活動を知るため、また、そこで活動している方々に現状を教えてください、新しい情報を得るために私たちは4度、奈良県の保護施設(world love heart)でボランティア活動に参加した。保護施設でわかったことは、それぞれの個体によって性格が異なり、特に柴犬や日本犬は、世話の仕方を注意しなければ、飼い主の言うことを聞かなくなってしまうということだ。これにより「思っていたより世話が大変」、「思っていた性格の子ではない」と感じてしまう人が多く、結果として飼わなくなってしまう。

さらに、規則性を見つけられず停滞していた譲渡率についても新しい情報を得ることができた。譲渡のことを調べても各市での取り組みに差が出ず、規則性を見つけることができなかったのは、譲渡率に大きく関わっている譲渡会の活動の管理に不備があったからだ。もし、ボランティアの人数や具体的な経営方法などのデータがそれぞれの保護施設で管理されていれば、譲渡率が高い市の活動を実践すれば、どの地域でも譲渡率を高くすることができるのではないかと考えていたが、譲渡会では人の努力次第で結果が出る上、保護施設などは個人やボランティアなどが経営していることがほとんどであるため、細かい情報やデータが管理されておらず記録が残っていない。そのため、県のホームページで調べても、譲渡率の差と比例する取り組みの差が見つからないことがわかった。これにより、当初の目的である「殺処分をなくす」ことに殺処分率から各市の活動の差を割り出すこと、譲渡率から活動の差を割り出すこと、この二つから解決策を探すことはデータに正確性がないため現実的ではないと考えた(図2)。

A	B	C	D	E
	譲渡数＋返還数	犬の引き取り数	譲渡率	少数第一四捨五入
青森	171	267	64.04494382	64
宮城	356	325	109.5384615	110
山形	267	386	69.17098446	69
福島	97	91	106.5934066	107
茨城	1018	1019	99.90186457	100
東京	142	141	100.7092199	100
神奈川	203	198	102.5252525	102
新潟	180	158	113.9240506	114
福井	92	85	108.2352941	108
京都	62	62	100	100
兵庫	79	152	51.97368421	52
奈良	51	76	67.10526316	67
岡山	200	197	101.5228426	102
広島	1200	1172	102.3890785	102
山口	1298	1349	96.21942179	96
徳島	528	831	63.53790614	64
香川	1125	1493	75.35164099	75
愛媛	222	669	33.1838565	33
長崎	367	789	46.51457541	47

図2: 譲渡率 ※ 環境省参考

3. マイクロチップ埋め込みの現状

次に、マイクロチップに着目することにしたが、令和4年6月1日にマイクロチップが義務化された。マイクロチップは動物の体に埋め込む迷子札のようなもので、害もなく、1度埋め込むと交換の必要はない。マイクロチップの大きさは、約2ミリメートル、長さ約11ミリメートルで、一般的な注射をするのとはほとんど変わらない行為で埋め込みができるために、動物への負担やストレスが少なく、様々な試験により安全性も確認されている。マイクロチップを入れて、身元が分かれば、災害の時にいなくなったり、迷子になってしまった際、家族の元に戻ってこられる可能性が高くなるのだ。またマイクロチップを埋め込むことで人も自分が飼い主であるという意識が高まり、犬を捨てる人も減ると考えられる(図3)。

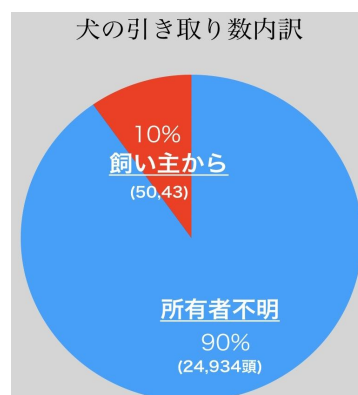


図3: 犬の引取り数内訳

出所) 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

4. 結論

図3よりマイクロチップ導入前まで、新しく飼われる犬の約7割はブリーダーとペットショップから買われている。令和4年6月1日以降にブリーダーやペットショップから引き取った場合、マイクロチップを導入した犬が販売されているため、約7割の犬の身元が判明すると考えられる。そして図3より、保護施設に引き取られる犬の9割は身元がわからない状態だが、このマイクロチップ導入から何十年か経つとその9割の身元が判明し、殺処分される犬が減少するという仮説をたてた。これらのことから、身元不明により保護施設に引き取られる犬の数を減らすことができ、マイクロチップは殺処分減少につながってくると考えた。だが、人に危害を与えてしまったり治せない病気などの様々な理由で譲渡が不可能な犬が存在したりすることは避けられない。実際にマイクロチップによりどれほどの効果が出るかわからないため、私達はこれからの経過を観察していこうと考えている。

5. おわりに

今回の探究を通して、譲渡率を上げるための活動は何なのかを具体的に見つけることはできなかった。だが、壁にぶつかった際にはグループで話し合い、新たな仮説を立て、それに向けて再び探究を始めるといふ、途中で諦めない力がついたと感じた。まだ日本には殺処分を行わざるを得ない地域がある。これからも無駄な命を減らす活動を続けると共に、日本の殺処分を無くしていく活動を応援し、広めていきたい。

6. 謝辞

本探究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、水本先生、松本先生に深謝いたします。ボランティアに参加させていただきましたworld love hartの皆様には本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力頂きました。また、多数の質問にご回答を下さった、呉市、浜松市、松山市、札幌市、名古屋市の動物愛護センターの皆様には本探究の遂行にあたり多大なご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

7. 参考文献・出典

https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html (環境省:統計資料「犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容並びに処分の状況」)

<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=348AC1000000105> (環境省:昭和四十八年法律第百五号 動物愛護及び管理に関する法律)